天に輝く日輪の如く

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天に輝く日輪の如く

【Ｎコード】
Ｎ４１７０Ｚ

【作者名】
まどろみ猫

【あらすじ】
時は戦国、処は安芸の国。下級武士の娘である小菊（こぎく）は、突然の事態に戸惑うことしかできなかった…。安芸の国のみならず、中国地方を統べる冷酷なる策略家・毛利元就からのお呼び出し。拒否などできるわけもなく、殺される覚悟を決めた小菊は、高松城へ連れて行かれる…。
日輪の申し子と、小さな菊の花のような娘。他者を拒み孤独に生きる青年と、他者の幸せを願う心優しい娘。
これは、そんな二人の、目には見えない『愛』の物語…。

小さな菊の花（前書き）

はじめまして、まどろみ猫と申します。小説を書くのが趣味です。慣れないパソコンで、人生初の投稿です。

読んで下さる方へ。私は、少しでも上達したいので、できれば感想やアドバイスをお願いします。厳しいお言葉も、自らの糧にしたいと思っております。…ですが、登場人物への批判はおやめください。

この作品は、戦国ＢＡＳＡＲＡの二次創作です。毛利元就様に、幸せになっていただきたいと書きました。しかし、元就様のキャラが崩壊しておりますので、無理と感じた方はお逃げください。

以上、わかったよという方はお読みください。

小さな菊の花

「…小菊！小菊はおるか！」
屋敷に響く、父上の声。
縁側で、美しく咲き誇る桜を眺めていた私は、驚いた。
「父上！小菊は、ここにおります！」
普段温和で滅多に大声など出さない父上が、あのように必死に私を呼ぶなんて、何事かあったに違いない。
「小菊！…うぅ」
「ち、父上！？」
駆け寄ってこられた父上は私を見るなり、泣きだしてしまわれた。
「どうされたのですか、父上？」
尋ねても、溢れる涙を拭いもせずに男泣きにくれる父上。
…父上の涙を見たのは、あの日以来。母上が、亡くなった日。
困惑と、不安。それらが胸中に、じわじわと広がっていく。
「…こ、こぎくを…そなた、を…」
「？私が、どうかしたのですか？」
しゃくりあげながらも、父上は言葉を紡ぎだす。
「元就様が、小菊を、た、高松城に、連れてこい、と…」
一瞬、目の前が真っ暗になった。
「わ、私を、ですか？この中国地方を統べていらっしゃる毛利元就様が、そうおっしゃられたのですか？」
有り得ない。何かの、間違いだ。そう、思いたいのに。
「高松城から、使いが来た…元就様が、直々の文を…」
父上が握りしめて、くしゃくしゃになってしまった文。
震える手で、受け取る。とても綺麗で読みやすい字が、目に入る。
『貴様の娘を、我が居城である高松城へ連れてこい。従わなければ、貴様の家は取り潰す』
記されている名は、毛利元就。安芸の国の君主にして、中国地方

を統治する、冷酷なる策略家。
「…一体、どういうことでしょう…」
下級武士の娘である私と、元就様に面識などない。なのに、どうして。
「…儂にも、さ、さっぱり、わからん…。あのお方が考えておられることなど…」
そう言うと、父上は再び号泣し始めた。
私は、ただ茫然とすることしかできない。
暖かい風が吹いて、庭の桜の花が、宙を舞った…。

道中、お迎えの輿の中で、私はぼんやりと考えていた。
お城に着いたら、どうなるのだろうか。殺されるのかもしれない。
「…理由くらい、教えてくださるかしら…」
四角く切り取られた、青空。香ってくる、花の、優しい香り。
今日が見納めになるかもしれない世界は美しく、輝いて見えた。

片田舎の下級武士の屋敷と、国主のお城では、比較することがまず間違っている。
「…すごいです…」
輿から降りて、広い広い部屋に案内される。襖も屏風も、決して派手ではないが、一目で質の良さがわかった。
一番良い着物を着てきたが、このお城の女中さんのほうが、良い着物を着ているかもしれない。
世界が、違うのだ。しみじみと、そう思った。

広い部屋で、一人座している間、ずっと父上のことを考えていた。
母上に先立たれ、後妻を娶ることなく、ただ私の成長を楽しみにして、不器用な愛情を注いでくれた父上。
女の身でありながら、学ぶことを好んだ私を、笑顔で褒めてくれた父上。

木に登って降りられなくなった私を、助けてくれた父上。
お城からお迎えが来たときも、泣いていた父上。
『儂が泣くのは、そなたが嫁ぐときと思っておったのに…』
何も、言えなかった。無事で帰ってまいりますなどと、果たせるかわからない約束は、できなかった。
生きるか死ぬか。私の命は、元就様の掌の上。
二度と、会えないかもしれない。…嗚呼。
「…別れの言葉も、感謝の言葉も、言えなかった…」
後悔、している。何も伝えられなかったことを。
そうして、私は独り泣き始めた。

襖が、静かに開かれた。
部屋に入ってきたのは、一人の年若い男性。
私は慌てて涙を拭い、顔を上げた。
「……」
無言で、男性は私を見つめている。無表情で。
(こ、この方は一体どなたなのでしょう?ずいぶん細身で、お顔が整っていらっしゃる…ああ、なんだか視線が痛くて、整っておられるから無表情なのが余計に怖いです…)
突然の男性の登場に、混乱した私の口をついて出た言葉は、
「あの、その…こんにちは…」
しどろもどろな、挨拶だった。
「……」
男性は無表情なまま、私の前に立った。
(…お、怒らせてしまったのでしょうか!?なんだか、眉間におしわができているような…)
「……そなたが、小菊か?」
広い部屋に、静かに響いた男性の声は、氷のように冷たかった。
耳を疑うほど冷たいその声に、背が震った。
「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…

？」

見上げた男性の口が、ゆっくりと開かれる。

「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

小さな菊の花（後書き）

…この作品を、読んで下さった方はいらっしゃるのでしょうか？

他の方々が投稿された作品を読んで、ますます自信を失くす私です。読むのと書くのでは大違い…でも書きたい。そんな私のことを馬鹿だと思われた方はいらっしゃるでしょうが、それでも私は書き続けます。

投稿は、時間が許す限り頑張ります。小説を読むのと書くのを至福とする私ですが、仕事もありますので不定期となってしまうでしょう。それでも…読んで下さる方がおられたら…嬉しいです。

最後に。読んでくださって、ありがとうございました。

記憶の中の面影を追う（前書き）

どうやら、私の書いた作品を読んでくださった方がいらっしゃったようです。ありがとうございます！これからも頑張りますので、よろしければご覧になってください。

…今回は元就様視点です。ここまでは、キャラ崩壊もたいしたことはありません。この話以降の元就様は、暴走されます。

記憶の中の面影を追う

我は、安芸の国を治める毛利元就。
毛利の御家を守るのが、我の役目。為さねばならぬこと。
そのためならばと、人の心を殺し、この激しき動乱の時代を生き抜くため、面を被った。
我にあるものは、毛利の家と、それを守るという重責と、天に輝く日輪のみ。
…それでよいのだ。あの、四国の鬼のようになど、我は生きられぬ。
誰にも、我は理解できぬ。仕方のないことだ。
所詮は我も、駒の一つでしかないのだ…。

各地の動きに気を払い、政務をこなし、日輪を崇める…。
我に、休息などない。気を抜くことなど、あってはならない。
謀反によって織田は滅び、覇王・豊臣秀吉が台頭してきた。あの大猿の理想と、それを為さんとするために手にした軍事力を考慮すれば、誰でも予想できることではあるが。
…我は、毛利の家の繁栄と、中国地方が安泰ならば、それ以外はどうでもよい。

城の天守から、輿がやってくるのが見えた。
あの輿の中に、あやつがいる…。
ざわと、心が騒いだ。…だが、不快ではない。
「…礼を、せねばならぬからな」
あやつは、憶えておるだろうか？

城の一室。中央で一人座しているあやつの姿は、驚くほど小さく見えた。

…まぁ、我の表情は、変わらず無表情なのだが。
我が部屋に入ってきたのに気付いて、あやつが顔を上げた。
…我の鼓動が、少し早まった気がする。
切り揃えられた黒髪は濡れたように艶やかで、肌は白く、人形のように整った顔立ちをしていた。
実際、袖を動かさなければ、本当に人形が安置してあるかのように見えただろう。
長い睫毛に縁どられた、大きな漆黒の瞳に、我が映っていた。
「……」
言おうと思っていた言葉が、出てこない。座していた者は、我の記憶の中のあやつとは、もはや別の者だった。
我が何も言わぬので、困惑したように視線を揺らしていた娘の、薄桃色の唇が動く。
「あの、その…こんにちは…」
声は、鈴が転がるかのように、澄んでいた。
「……」
どうやら、我がこの城の城主である毛利元就だと気付いておらぬようだ。もしくは、混乱しておるのか…。
無言のまま、我は娘の前に立つ。
…近くで見ても、やはり小さい。娘の中でも、小柄なほうだろう。
作り物のような娘。我はふと、娘の頬に涙の跡があるのに気が付いた。先程袖を動かしていたのは、流していた涙を拭っていたのだろうか？
なぜ、泣いていたのか。我には、解らぬ。
…否。我に理解できぬことなど、あるはずがない。
「……そなたが、小菊か？」
できるだけ、穏やかな声で問う。下級武士の娘とはいえ、幼き日の我を助けてくれた恩人なのだ。
「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…？」

我を見上げる娘の瞳には、怯えの色があった。見慣れた、怯えた色。しかし、我が駒どもとはどこか違う。

数瞬で、合点がいった。この娘は、冷酷と称される毛利元就ではなく、突然現れた見知らぬ男に怯えておるのだ。

さて、名を尋ねられて答えぬわけにはいくまい。この小さな娘が、我が名を聞いて畏縮することは確実だが。

「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

記憶の中の面影を追う（後書き）

…実を言いますと、私は控えめで健気な女の子が大好きなのです。小菊ちゃんは、私の好みの女の子です。こんな優しい子が、元就様の御心を癒してくれたらという願望が、はっきりと文字に表れています。

読んでくださった方へ、心よりお礼申し上げます。感想、アドバイスお待ちしておりますが、登場人物に対する批判だけはおやめください。

次話も、数日内に投稿してみせますので、読んでいただければ幸いです。

ある日の武将達（前書き）

今回は西海の鬼・長曾我部元親さんと、空気の風来坊である前田慶次さんが初登場です。アニキは四国に、慶次はふらふらしています。

さて、上達したいとのたまった私ですが、書くにあたり戦国時代の生活様式や時代背景などを調べていません。あれ？おかしいなと感じられると思います。言い訳はしませんが、本当にごめんなさい。

私にあるのは、書きたいという思いと元就様の幸せだけです。それでもいいよという方は、どうぞお読みください！

ある日の武将達

「…もみじまんじゅうってのは、うめぇが甘すぎんぜ」
安芸の国の土産物の代名詞であるもみじまんじゅうを嚥下して、俺は呟いた。
毛利の野郎が治める安芸。探りに行ったかわいい子分共が送ってきたのは、当然、もみじまんじゅうだけではない。
「…何々ぃ…」
ずずっと熱い茶をすすり、報告書を読み始める。
『アニキィ！お元気ですか！？俺達は元気にしてます！中国は毛利のおかげで平穏ですが、やっぱり俺達はアニキがいいっす！ああ、またアニキと一緒に海にでてぇなぁ…』
お世辞にも読みやすいとはいえない字で、子分共は中国で起こった出来事と、俺への想いを書き綴っている。
「…なんだか、報告書って感じじゃねぇな。まぁ、あいつららしいぜ」
苦笑する。海の荒くれには、平穏な毛利の御膝元は、刺激が少なくて物足りないのだろう。
『…でも、俺達の動きがアニキの役に立つんなら、俺達頑張りますぜ！あ、そういえば、妙な噂を聞いたんですが…』
妙な噂？湯呑を置き、真剣な顔で読み進める。
『ほんとかどうか、まだわからないんですが、毛利の野郎、城に女を一人囲ってるって噂です！もう、俺達たまげちまいました！だって、あの毛利の野郎がですぜ！？』
「毛利に女ぁ！？嘘だろ、おい！？」
叫んでから、俺は顎に手を当てて考え始めた。
（…いやいや、それは嘘だろ。あの毛利が…あのオクラが、女に興味を示したなんて聞いたことねぇぞ。なんてったって、「我は日輪と結婚する！」とかぶっとんだことぬかしそうな、あの毛利だから

な…。けど、あの野郎も男だからな。…ほっせぇし、女みてぇに綺麗な顔してやがるが）
気になる。ものすごく気になる。正直、勢力を拡大している豊臣の猿なんかよりも、こっちのほうがはるかに気になる。
「…おもしれぇじゃねぇか」
自然と、口の端が吊り上る。何度も言うが、あのオクラがだぜ！？
「ちょっくら、拝みにいってくるとすっか！」
もう、なんて言えばいいのか。…楽しみすぎるぜ！

「…ん？今、西のほうから恋の匂いがしたような…」
京の都。桜の木の下で一眠りしていた前田慶次は、目を瞬かせながら起き上った。
「キィー！キィー！」
相棒の夢吉が、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。
「どうした、夢吉？…もしかして、お前も恋の匂いを嗅ぎ取ったのか？」
「キキィッ！」
夢吉は元気よく答え、西の方を向く。
「キキッ！キキィッ！」
行こう、行こう！そう、夢吉は言っていた。
「うーん…いいねいいね！一体、誰の恋が見つかるだろうね」
超刀を担ぎ、夢吉を肩にのっけて、ゆっくりと歩み出す。
「元親のところにも、寄らせてもらおうか！」
達者で暮らしているであろう、友の顔を思い出しながら、慶次は日ノ本の西を目指すのであった…。
「キキッ」
（訳：いつまでも他人の色恋に首突っこんでないで、そろそろいい人見つけたら？）

ある日の武将達（後書き）

アニキの口調は、なかなか難しいです。というか、小菊ちゃんの口調もあまり定まっていません。…丁寧語と敬語は、違うのです。図書館で、本を探したのですが、なぜか見つからずに突っ走りました。

構想はあるのですが、書いたらものすごく長くなってしまいます。お付き合いいただけたら、と…願っております。

私の前書きと後書き、長いでしょうか？読みにくいでしょうか？読んで下さった方へ。ありがとうございます！

叶わぬ望み（前書き）

…本当に、パソコンって難しいですね。サイト？ＨＰ？を作って、書いた作品を載せたいなどと考えているのですが、まったくやり方がわかりません。あ、でも初心者がそんな真似すると危険でしょうから、やっぱりやめたほうがいいんでしょうね。

今回は小菊ちゃん視点と元就様視点です。どうぞ、お読みください。

叶わぬ望み

頭の中が真っ白になった。冗談ではなく。
（え？このお方が元就様？お若いとはお聞きしていたけれど、私より幾つか歳が上なだけなんて…。っああ！私、中国地方の支配者たるお方に『こんにちは』なんて気安く挨拶してしまいました！なんて無礼なことを…！）
「……あ、あの、元就様…」
謝罪しなくては。そう思い、そうしようとするのに、緊張して上手く言葉が出てきそうにない。
冷や汗が流れ、口の中がからからに乾いている。
（ううっ！な、なんだか頭がくらくらしてきました…）
「…何か、望みはあるか？」
あまりの緊張に意識が遠のきかけた私に、元就様がお言葉をかけてくださいました。
「の、望み…ですか…？」
予想だにしないお言葉に、私は戸惑った。
「そうだ。そなたの望みを、我が一つ叶えてやろう」
申してみよと、促される。片膝をつき、私のような者と視線を合わされた元就様は、面を被ったかのような無表情。
帰りたい。生まれ育った屋敷に。父上の、元に。
望みは、ただそれだけだったのに。その、はずだったのに。
「…笑って、くださいませんか？」

…まったくもって、この娘には驚かされた。この我が、だ。
着物、簪、宝玉、金子、父親の昇格、領地拝領。大方、それらを望むであろうと思っていたが、娘の望みは我の想定を超えるものだった。
「…笑って、くださいませんか？」

おずおずと、娘は言った。敵兵はもちろん、家臣や兵士達すら恐れ、ろくに合わせようとしない、我の凍てついた眼を、
真っ直ぐに、見て。
「…なぜだ？」
想定外の答え。その、真意はなんだ？
我が笑って、そなたが得することなど、何一つとしてあるまい？
「…元就様、お会いしてから一度も感情を表されなかったものですから、その…」
俯き、ただでさえ小さい身体をますます縮めて、囁くように娘は言った。
「…笑まれたお顔を、拝見したいと…思い、まして…」
俯いてしまったので、どのような表情をしておるのかわからぬ。
…我はといえば、相も変わらぬ無表情。笑むのが必要であるなら、どんな時だとて笑ってみせよう。…が、
「…我は、心から笑むことはできぬ。…心など、持ち合わせてはおらぬゆえ」
娘が、驚いたように我を見つめてくる。
毛利を守るという存在意義のため、我は心を凍りつかせた。ゆえに、笑むときの我の心には、一部の喜びも嬉しさも楽しさもない。
ただ、我の氷の面が、笑みを形作るのみ。…それでいいのだ。笑みなど…。
「…そんなこと、ないですよ」
娘の、優しく穏やかな声。
「元就様、今一瞬だけ、悲しそうでした。感情のある人ならば、笑うこともできるはずです」
大丈夫ですよ。そう言って、娘は微笑んだ。
ああ。…やはり、この娘はあやつなのだ。
幼き我を、迫りくる闇に怯える我を、救ったときと同じ。
変わらぬ笑顔。変わらぬ優しさ。
…変わったのは、変わってしまったのは、我の方なのだ。

叶わぬ望み（後書き）

…うぅ…感想が…評価がほしいです。どうか、お願いします。
他のジャンル（ポケットモンスターやゲーム）でも投稿したいと思っておりますので、お見かけになられたらぜひご覧になってください！
一応、自分で考えた作品も書いて投稿する予定です。
ありがとうございました！よろしければ次回も、お願いします！

申し子と菊の花（前書き）

小菊ちゃんが、高松城で暮らしはじめました。お城の人達は、あんな幼い子（年齢は十七歳です）を、元就様はどうするのだろうと思っています。もちろん、元就様は駒に事細かく事情を説明したりはしません。ただ客人としてもてなせと命じただけです。

それでは、お読みください。

申し子と菊の花

…元就様は、結局、私を呼び寄せた訳を教えてくださらなかった。お気に障ったのかもしれない。あんなこと、言うべきではなかったのかもしれない。

でも、心などないとおっしゃった元就様は、本当に悲しげだった。それは、ほんの一瞬で、すぐかき消されてしまったけれど。

「…冷酷な方、なのかしら？」

話に聞いていた方とは、どこか違うような気がした。

与えられた部屋で、一人考える。疑問は山のようにあるのに、私にはそれらを解決するのに必要な、情報が不足している。

「それにしても、どうして私を…」

元就様のお人柄、これからの高松城での生活、父上が今頃どうしているか…などなど、思うことは多々あれど、一番の疑問はやはりそれだった。

「…わからないことばかりです…」

ため息をつくことしかできない、私だった。

娘…小菊が城に来て、数日経った。他愛のない話をするだけだが、不思議と我はそれを楽しんでおる。

どうやら小菊は、我と初対面だと思っておるらしい。我としても、自分より年下の女子に助けられたことなど、己の口からは言いたくはない。言いたくはないのだが…。

礼は、せねばなるまい。そう考え、望みを訊いたというに…。

まさか、我の笑顔とは…。計算してないぞ！

晴れ渡る空を見上げる。今日も、日輪は美しく輝いており、平穏そのもの。素晴らしい日々である。

「…感情、心…」

日輪を崇めるとき、胸の辺りが暖かくなる。

駒がしくじったとき、苛立つ。
必要ないと、邪魔なだけだと、凍らせ捨て去ったはずのもの。まだ、我の中に残っているのだろうか？
残っているとすれば…我は、それを…。
消さねば、なるまい。
全ては…毛利の、為に。

「…書物が、たくさん…！」
一室にあるのは、文机と、棚にきちんと収納された大量の書物。
「いつでも、好きな時に読むとよい。我が許可する」
こんなにもたくさんの書物を所有しておられるとは…流石、智将です元就様！
「ありがとうございます元就様！とても嬉しいです！」
喜びと興奮で、頬が上気しているのがわかる。私にとって、ここは天国だ。
「…ふん」
鼻を鳴らして、元就様は部屋から出て行ってしまわれた。お忙しい方なので、お仕事を片付けに行かれたのだろう。
元就様がお仕事をされているというのに、私などが書物を読んでいてよいのだろうか。
「ああっ…まだ見ぬ書物が、私を呼んでいる…！」
しかし、思いとは裏腹に、ふらふらと棚に近づいていく私なのであった…。

「……」
（何なのだ、あの娘は！？）
あれしきの量の書物で、ああも喜ぶとは…。
『ありがとうございます元就様！とても嬉しいです！』
小菊の声が、上気した頬が、潤んだ瞳が…頭から、離れぬ。
「……」

（我は、一体どうしたのだ！？）
落ち着けと、己に言い聞かせる。常に、冷静でおらねば…。
計算通り。我のこの動揺以外は、計算通りなのだ。
小菊は、喜んだ。それでよい。
我は、喜ぶ小菊を見て…嬉し、かった。
「…よいのだろうか…」
我が、他人の感情に振り回されることなど、あってよいはずがない。解っておるのに。
それなのに、この胸にあるものは、何なのだ！？

申し子と菊の花（後書き）

…私の作品、つまらないでしょうか？駄作でしょうか？もっとギャグとか入れたほうがいいのでしょうか？何気ない生活風景とかも、入れたほうがいいでしょうか？…な～んて、全部意見を求めるようではだめですよね。やっぱり、自分で考えないと！

たとえ、どなたも読んでくださらなくとも、投稿はしますよ私！…姉や妹に尋ねたら、投稿して数日で感想を求めるなと叱られました。そうでしょうけど、不安なんですよ…。

今回も読んで下さった方、ありがとうございます…いらっしゃいますか？

薬酒と月と闇（前書き）

感想いただきました！やったぁぁぁぁぁぁぁぁ！です！返信させていただきましたが、この行為はネット上では失礼にあたるのでしょうか？もしそうならば、ごめんなさい。

これから、元就様が暴走されます。公式のあの方とは、ほとんど別人です。ですが、公式であの方にお相手はいないので、ひょっとしたらこうなる可能性もなきしにもあらずです！…ないでしょうが。

大丈夫！という方、どうぞ！

薬酒と月と闇

「嗚呼…幸せ、です…」
夕餉、湯浴みを済ませた私は、うっとりと呟いた。自室の窓から降り注ぐ、柔らかな月光を浴びながら、
（はぁ…あんなにもたくさんの書物が読み放題なんて…！明日は歌集を読ませていただきましょう…あ、でも、物語も読みたいです…）
などと、本のことばかり考えていた。
「…そなた、聞いておるのか？」
（ずうっと、読んでいたいところですが…蝋燭がもったいないですからね。私は、我儘なんて言ってはいけません。迷惑をかけないようにしないと…）
物思い（九割が本、一割が元就様への感謝の思い）に耽っていると、誰かに肩を掴まれた。
「きゃあ…むぐっ！？」
びっくりして悲鳴を上げかけた口を、手で塞がれる。
「…声を上げるでない。誤解されると面倒ゆえ」
この、感情のこもっていないお声は…。
「わかったか？」
部屋に明かりがないため、黒い影にしか見えない方に、頷いてみせる。
「…よし」
ぱっと、手を離される。
「元就様？いつから、いらっしゃっていたのですか？」
影と向き合う。私は月に照らされているが、元就様は闇の中だ。
もちろん、表情などわかるはずもない。
「先程から声をかけておったが…そなた、気が付かなかったのか？」
淡々と、言葉が部屋に響く。
「…ごめんなさい。考え事をしていたので…」

失礼ですむことじゃない。一国の主を無視するなんて、殺されたって文句は言えない。
「…まぁよいわ…ところでそなた、酒は飲めるか？」
ちゃぽんと、水音がした。どうやら、瓶を持っておられるらしい。
「えっと…飲んだことがないので…わからないです」
正直に答える。すると、
「そうか…我が作った薬酒ぞ。特別に飲ませてやろう」
杯を渡される。…断ることなど、できそうにない。
「案ずるな、強い酒ではない」
畏れ多くも、元就様に注いでいただいた。漂う、お酒の匂い…。
「ありがとうございます…では、いただきます」
意を決し、朱塗りの杯に口づける。
（～～～～～～～～～～～～！！！！！）
喉が、焼ける。薬草の強い苦味と、微かな甘味。
「…どうだ？口に、合うか？」
期待されているのが、わかる。元就様が、少しでも感情を表してくださったのは嬉しいが、これは…。
（…無理！これは無理ですぅ！喉がひりひりしています！）
初めて飲んだお酒は、とても『美味しい』と言えるような味ではなかった。薬を飲んだような、ひどい気分。
でも、元就様が、こんな夜更けにわざわざ持参してくださったと思うと…。
「美味しいですよ。ちょっと、苦いですけど」
どうしてだろうか。嬉しくて、喉の痛みも忘れてしまえる。
「…当然よ。我が作った薬酒ぞ？」
暗闇の中。見えない元就様が笑まれたような、そんな気がした…。

昨夜、小菊の元を訪れて、我の手製の薬酒を酌み交わした。
頬をうっすらと赤く染め、小さな白い手で杯を持ち、月光の下で座す単衣姿の小菊には、昼間の可愛らしさとはまったく別の、女と

しての艶やかさがあった。
筆を止め、己が手を見る。…昨夜、我のこの手は、何をしようとしていた？
抱き寄せ、ようと。酒瓶も杯も投げ捨てて、小菊を抱き寄せようと、しておった。
我のものに。あの娘を、我がものにしようとして…とどまった。
あの時の我が持てる理性を総動員して、伸ばしかけた手を止めた。それは、小菊を想ってのことではなかった。
怖くなったのだ。我が意のままに小菊を抱いた、その後が。
拒絶を。向けられるであろう、失望と怯えの目を。
嫌だ。そんな目で、見られるのは。小菊の心から、我がいなくなるのは。
我は、我のことしか考えていなかった。そんな己が、何より腹立たしかった。
「…小菊」
こんな我を、そなたは嫌うだろうか？

薬酒と月と闇（後書き）

リアリティーを追求したいのですが、性別だけはどうしようもありません。こればっかりは、生物学やら心理学やら、難しい本を読んで調べるしかなさそうです。…男性に質問できることでもないですしね。

あぁ…時間だけが、足りない…。

読んで下さった方、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4170z/

天に輝く日輪の如く

2011年12月17日10時52分発行